

映画で共に生きる社会を
今村彩子

いま次の作品のために、静岡県湖西市でサーフィン・ハワイアン雑貨を扱っているお店のオーナー、太田辰郎さん（ろう者）を取材しています。太田さんは、大学時代からサーフィンを続けており今年で三十二年目。二〇年間勤めていた会社を辞め、三年前に長年の夢だったお店をオープンしました。

取材で印象に残ったのは、サーファーと太田さんが話している場面です。サーファーたちは慣れない身振りで表し、太田さんは「自分は発音が上手ではない」と言いながらも、声を出して身振りを交えて話しています。

「耳の聞こえる人が耳の聞こえない人のために分かりやすく話している」というより、言葉の違う人が好きなサーフィンを通して、お互いにコミュニケーションをとりたいという気持ちがすごく伝わってきます。

ろう者の中には、自分の声には自信がなく、「一〇〇%通じるわけではないので出さない！」という人もいます。私もその気持ちはよく分かります。ろう者の聞きなれない声を聞く聴者の中には、「ろう者は大変で

かわいそうだ」という気持ちを無意識に深めてしまう人もいます。

しかし太田さんは、自分の発音が下手だと分かっているけれど、少しでも通じるならと声を出しています。それは、「伝えたい」という気持ちが強いからだと思えます。だから、手話とは全然縁のなさそうなサーファーたち（真っ黒に日焼けしていて、怖そうなお兄ちゃん。もし取材がなければ、絶対関わることにはなかったでしょう）が太田さんと、楽しそうに慣れない手振り身振りで話している様子は、まるで英語のうまいアメリカ人がお互いに相手に伝えようとしているようです。

常連のサーファーにインタビュした後、筆談で聞かれました。常連さん「何で、太田さんを取材しているの？」

私「日本で、ろう者でサーフィンのお店を営んでいるのは太田さん一人だからです」

常連さん「ええー!? そうだったの？」

私は逆に、常連さんの反応に驚きました。

私「ろう者でサーフィンのお店を営んでいる人、他にもいると思っていたの？」

常連さん「うん。ろう者でサーフィンをやっている人は多いから、お店を営んでいる人も多いかと思うた」

なるほど……。その発想が面白いと思いました。一般の人たちは、お店を営めることは聴者でも大変なこと、ろう者が営んでいるという事に驚きますが、彼は、逆に日本で営んでいるろう者は一人だけという事実が驚いています。

それは彼がろう者のことを、「生活が大変で苦労しているであろう障害者」として見ていないからだと思ふべき、うれしくなりました。サーファーたちは太田さんのことを「たつりん」と親しみを込めて呼びます。彼らは、手話ではありません。身振りと筆談で話しています。手話を覚えようという気持ちよりも伝えたいという気持ちがうれしい。その気持ちはすごく伝わるから。

今日も太田さんは、サーファーに話しかけます。「今日、波に乗った？」

今村彩子（いまむら・あやこ）

愛知県名古屋出身。愛知教育大学教育学部卒業。Studio AYA代表。カリフォルニア州立大学ノースリッジ校留学（映画学科・アメリカ手話を学ぶ）。現在、名古屋学院大学、愛知学院大学で講師をする一方、ろう・難聴者を取り上げたドキュメンタリーを制作。国内だけでなく、アメリカやカナダ、韓国など海外にも取材に行く。全国各地で自主上映や講演活動もこなしている。<http://studioaya.com/>

【珈琲とエンピツ】

今村彩子ドキュメンタリー映画（2011年完成予定）
太田さんのお店の日常を描きながら、言葉だけではないコミュニケーションから生まれるもの、相手を思う気持ちから生まれるものを描く。



太田辰郎さん

※映画制作には多額のお金がかかります。そのため制作費を集めています。皆様の応援をお願いします。